地域の定住人口に対するプロスポーツクラブの影響について
～　アルビレックス新潟グループの事例に関する考察　～

The Impact of Professional Sports Clubs on Residential Population
Consideration through the Case Study of Albirex Niigata Group

スポーツクラブマネジメントコース
５０１５Ａ３１３－４　中村　勉　　研究指導教員：間野　義之教授

１．研究の背景

国内の社会問題として、地方創生に注目が集まっています。地方創生に向けた全国の知事会の提言など、地域とスポーツの関係性についてふれられている。

一方、Ｊリーグでは早くから地域とスポーツの関係について注目していた経緯があり、Ｊリーグ百年構想ではアルビレックス新潟など地域との関係に根差したチームの誕生を促した。この百年構想には、「サッカーを核に様々なスポーツクラブを多角的に運営すると提言されている。

２．先行研究の検討

2.1 スポーツ産業と地域活性化に関する研究

80 人の雇用（選手、スタッフ等）を創出し、年間 24 億円の収支をもつベンチャー企業としての鹿島アントラーズＦＣが生まれたことは、地域産業に大きなインパクトを与えたものと思われる（大館,1998)。「スポーツによるまちづくり」に関する研究や報告は経済的効果やインフラ整備・充実に関連したものが多く、ファンのチームアイディンティティと地域住民の意識に着目した研究は少ない（藤本ら,2015)。このことから、プロスポーツクラブにおける雇用創出や定住について調査、研究をおこなうことの価値は十分に高いものであると考える。

2.2 他の産業、地域における定住意向調査

中山間地域における農林業生産と定住促進政策に関する意向調査の分析（井口ら,1995）の結果、全体で 3.66%の定住意向であった。一方で、新規定住者を受け入れて農村側の意識は、併せて 84.0%を占めた（小森,2007）

2.3 スポーツ産業規模について

2012 年時点の国内 GDSP（国内スポーツ総生産）は、当時の名目 GDP2.4%を占める。これは国内主要産業の一つである鉄鋼産業や輸送機械産業より大きく、スポーツ産業は相応の規模を有する産業であるといえる。(日本政策投資銀行,2015)

３．研究の目的

本論では、プロスポーツと地方創生を結びつけるものとして、プロスポーツクラブ設立による定住人口の動態について調査する。対象は、日本で一番多くの複数種目のスポーツクラブチームを保有する複合型プロスポーツクラブに着目し、アルビレックス新潟と、同規模の地域にある単独種目のプロスポーツクラブによる雇用創出と定住についての影響について明らかにする。先行研究から現役を引退した選手、そのプロスポーツクラブを離職したスタッフにおいて、その後も同じ域内に住み続けている居住者を「定住」人口として定義する。

４．研究方法

本論では、研究方法として上述の対象クラブの担当者に、質問紙をメールによる調査を実施した。対象クラブは 3 クラブ。全アルビレックス新潟クラブに関わる選手・スタッフの新潟県内への定住を調べると共に、他の 2 クラブは、選手の定住について調査することとした。

５．結果

5.1 調査実数特性について

10 種目のアルビレックスクラブに関わった選手、スタッフ全員を対象に、調査をした。表 2 のとおり、アルビレックス新潟グループの雇用者は、新潟県内出身者 338 名に対し、327 名が離住しなかった。新潟県外出身者は 712 名中、48 名が定住した。一番、定住率が高かったのは、ウィンタースポーツで 20.0%であった。

表１　アルビレックス新潟グループにおける新潟県への定住

チーム・種目名	県内出身者合計数	県内出身離住者数	県内定住者数	県内定住率	県外出身合計数	県外出身離住者数	県外出身（現役）	現役引退、退職後定住数	現役引退、退職後定住率	合計雇用者数(累積)
男子サッカー	68	3	65	95.6%	269	210	45	14	5.2%	337
女子サッカー	4	1	3	75.0%	93	75	15	3	3.2%	97
男子バスケ	6	0	6	100.0%	108	91	13	4	3.7%	114
女子バスケ	3	0	3	100.0%	28	10	14	4	14.3%	31
野球	0	0	0	0.0%	99	68	16	15	15.2%	99
チアリーダーズ	218	0	218	100.0%	37	34	2	1	2.7%	255
陸上	12	4	8	66.7%	42	25	15	2	4.8%	54
ウィンタースポーツ	12	1	11	91.7%	15	1	11	3	20.0%	27
レーシング	10	2	8	80.0%	20	10	8	2	10.0%	30
オールアルビ	5	0	5	100.0%	1	0	1	0	0.0%	6
合計	338	11	327	96.7%	712	524	140	48	6.7%	1,050

5.2 新潟県外出身選手・スタッフ別における定住

結果として新潟県外からの選手の定住率が 4.5%、スタッフの定住率が 26.0%だった。Ａチームの定住率は 10.0%、Ｂチームの定住率は 4.5%だった

表２　県外出身選手・スタッフにおける定住者数、定住率

チーム・種目名	県外選手（累計）	県外出身選手(離住者数)	県外出身選手(現役)	県外出身選手引退後定住者数	県外出身選手引退後定住率	県外スタッフ(累計)	県外出身スタッフ(離住者数)	県外出身スタッフ(現役)	県外出身スタッフ退職後定住者数	県外出身スタッフ退職後定住率
男子サッカー	245	208	30	7	2.9%	24	2	15	7	29.2%
女子サッカー	90	73	15	2	2.2%	3	2	0	1	33.3%
男子バスケ	91	77	12	2	2.2%	17	14	1	2	11.8%
女子バスケ	21	8	12	1	4.8%	7	2	2	3	42.9%
野球	85	62	12	11	12.9%	14	6	4	4	28.6%
チアリーダーズ	36	33	2	1	2.8%	1	1	0	0	0.0%
陸上	39	22	15	2	5.1%	3	3	0	0	0.0%
ウィンタースポーツ	13	1	11	1	7.7%	2	0	0	2	100.0%
レーシング	19	10	7	2	10.5%	1	0	1	0	0.0%
オールアルビ	0	0	0	0	0.0%	1	0	1	0	0.0%
合計	639	494	116	29	4.5%	73	30	24	19	26.0%

チーム・種目名	県外選手（累計）	選手定住者	定住率
Ａチーム	90	9	10.0%
Ｂチーム	202	9	4.5%

5.3 新潟県外出身の男女別における定住

結果として男性の定住率は6.9%、女性の定住率は6.4%だった。平均居住年数は3.2年であった。

表３　県外出身者における男女別の定住、累計居住年数

チーム・種目名	県外出身者男性	県外出身者男性定住者	県外出身者男性定住率	県外出身者女性	県外出身者女性定住者	県外出身者女性定住率	累計居住年数	平均居住年数
男子サッカー	259	11	4.2%	10	3	30.0%	782	2.9
女子サッカー	2	0	0.0%	91	3	3.3%	371	4.0
男子バスケ	107	3	2.8%	1	1	100.0%	283	2.6
女子バスケ	3	1	33.3%	25	3	12.0%	83	3.0
野球	99	15	15.2%	0	0	0.0%	239	2.4
チアリーダーズ	0	0	0.0%	37	1	2.7%	96	2.6
陸上	10	1	10.0%	32	1	3.1%	156	3.7
ウィンタースポーツ	10	2	20.0%	5	1	20.0%	221	14.7
レーシング	19	2	10.5%	1	0	0.0%	50	2.5
オールアルビ	1	0	0.0%	0	0	0.0%	5	5.0
合計	510	35	6.9%	202	13	6.4%	2,286	3.2

６．考察

6.1 新潟県内外における定住についての影響

新潟県内出身者の定住率が96.7%であったことは、すなわち327名が新潟を離住しなかったことに、地方創生の観点から大きな意義がある。さらに、新潟県の社会動態人口推移に関して、アルビレックス新潟がＪリーグ入りした1996年から2015年まで197,213人減っている。このことから鑑みても、単純にインフロー48名からアウトフロー11名を差し引くと37名増加したことになり、プロスポーツクラブが地域人口に貢献をしているといえる。

具体的に、アルビレックス新潟（サッカー）のホームタウンである聖籠町の人口推移でみると2007年から2014年まで、聖籠町の人口は547名増加しており、その内の16.3%にあたる89名がアルビレックス新潟の選手である。プロスポーツクラブが地域人口に影響を与えていると充分に考えられる。

6.2 競技種目による定住についての影響

野球の定住率12.9%が高い傾向の考えられる理由として、独立リーグおよび各クラブにおいて、セカンドキャリア教育をおこなっておることがあげられる。幹部スタッフからの話によると独立リーグのためシーズンオフには、選手は働きながらプレーをしており、そのまま引退後の就職する選手は少なくないといえる。

レーシングの定住率10.5%が高い傾向の考えられる理由として、新潟にしかない環境を求めて移住、そして定住をするケースが少なくないと推察される。

さらに、累計1,050名もの雇用創出があったことは雇用統計調査による「その他のサービス業の入職者数及び離職者数」が2010年は10,500人ということを考えると、10.0%にあたり、地域雇用に与える影響は少なくないといえる。

6.3 選手、スタッフの定住、他チームとの関連性

新潟県外出身の選手、スタッフともに離住者が多いのは、アルビレックス新潟グループが誕生した後に、全国各地でプロチームが多く誕生し、より地元に近いチームへ移住されたと考えられる。

また、先行研究によると引退する選手の平均引退年齢は、プロ野球選手：約29　歳、プロサッカー選手：約26歳（上代ら,2013)。すなわち、選手を引退して定住するということは20歳代～30歳代で引退しており、生産労働人口に寄与しているとも考えられる。

6.4 男女別における定住についての影響

男女別に関しては、表4のとおり男性の定住者数が女性より約2.7倍多い。定住率で考えると男性の方が女性の定住率より0.5ポイント高い。定住率で考えると、男性の方が仕事を見つけて安定を求める傾向や結婚をして新潟に残るケースが多いというふうに推察される。

女性選手だけのチアリーダーズに関しては、一番低い定住率となっている。それは、原則１年間のみの選手となっており、毎年オーディションをおこなっている。選手が入れ替わっていることも定住率が低い要因にあげられる。但し、オーディションは、再度受けることもできる。しかしながら選手がチームや地域への愛着が醸成される前に仕事を離れなければならないことで、再度オーディションを受ける意向をあまり示さないことや、別の仕事で新潟に残ることがないことにつながっていると推察される。

6.5 種目別における居住年数について

ウィンタースポーツに関しては、14.7年と設立当初から所属している選手、スタッフが多い。ウィンタースポーツにおいてプロクラブとして存在しているのは、新潟しかないため様々な企業からスポンサードをしていただきながら、長くプロとして活躍している。

女子サッカーに関しては4年と二番目に高く、同時期に入団した選手が同時期に退団している選手が多いことを考えると友人関係の繋がりが高いことが一つの要因になっていると推察される。

男子サッカーに関しては、近年、アカデミー組織からトップ昇格している選手も多くなり、地元出身の選手が増加傾向にあり、地域愛着が高いことも居住年数が増えてきている要因の一つと推察される。

７．結論

プロスポーツクラブにおける定住人口の増加、雇用創出については明らかであり、さらにプロスポーツクラブの新潟県内出身者において新潟県外への流出を防ぐことは、新潟県の生産労働人口に対する大きな効果を与えていることが明らかになった。また、他地域のスポーツチームにおいても、定住について調査することによって、複合型のプロスポーツクラブだけではなく、単独のプロスポーツクラブにおいても雇用創出や定住について影響があることが明らかになった。

８．研究の限界

調査段階では、定住だけの属性を調査項目としていたため、移住や離住の理由が移籍なのか他の要因なのか判明することができなかった。同様に、どの地域から移住、定住されたのかは残念ながら調査項目に入っていなかったことは次回への課題にしたい。